

字音読みと和訓読み ——漢文訓読から『今昔物語集』へ——

李 競一

漢文訓読では、全ての漢語に和訓が付けられるのではなく、字音で読まれている漢語と、和訓で読まれている漢語とが共存している。その原因として、一部の漢語は、意味が近似する和語がないため、そもそも和訓で読めないことが考えられる。但し、和訓で読んでも良い漢語が、字音で読まれることもある。特に注意すべきは、同一文献に見られる同一漢語（もしくは、同構造の漢語）において字音読みと和訓読みとが共存することがあるという事象である。このような字音／和訓の読み分けがどのような基準によるのかという疑問が、本論文の出発点である。

本論文では、まず、平安時代初期から中世にかけての漢文訓読資料（訓点資料及び仮名書き資料）を対象に、否定辞と複合する語（「未曾有」「不可思議」「無量」等）、及び、程度副詞と用言で構成される語（「甚深」「難解」等）を中心にその訓法について考察し、これらの漢語は①全体的に、名詞性が強い目的語・連体修飾等として用いられる場合は字音で、動詞性・形容詞性が強い述語として用いられる場合は和訓で読まれる、②その中、名詞・連体修飾としての使用頻度が高い漢語は、述語として用いられる際も字音で読まれる傾向があることについて論証する。そして、漢文訓読の世界では字音読みが定着した漢語「無量」の『今昔物語集』における使用状況について考察し、その字音と和訓が『今昔物語集』において併用される原因について考える。

〈本論文の構成〉

本論文は序章、第一章から第五章、終章から構成される。

第一章では、漢文訓読における同一漢語の字音／和訓の読み分けという問題の出発点として、妙一記念館本仮名書き法華経を取り上げる。

第二章から第四章では、漢語の訓法と文中機能との関係について考察する。第二章と第三章では仏典の訓読資料として、平安時代初期から中世にかけての法華経訓読資料、及び、西大寺本金光明最勝王経平安初期点と永長二年点を、第四章では漢籍の訓点資料として、主として史記延久五年点と白氏文集天永四年点を取り上げる。

第五章では院政期の漢字仮名交じり文資料である『今昔物語集』を取り上げる。

〈各章の概要〉

第一章「妙一記念館本仮名書き法華経における漢語の付訓——同漢語を読み下した本文和訓との共存について」では、鎌倉時代の漢文訓読資料である妙一記念館本仮名書き法華経（妙一本）を取り上げ、漢文訓読における同一漢語の字音／和訓の読み分けの実態を示す。

妙一本は法華経を訓読したものであり、その本文における和語（和訓読み）は仮名で、漢語（字音読み）は漢字で表記されているため、訓点本では場合によって判断しにくい和訓／字音の読み分けは、妙一本では一目瞭然である。このような理由で、平安時代の訓点資料ではなく、鎌倉時代の仮名書き資料である妙一本を選び、第一章に置くことにする。

妙一本は、法華経を読み下すだけでなく、本文における漢語に和訓や簡単な解釈文を詳しく付けている（例：「眉間の白毫相〈左傍訓：まゆのあいたのしろきけ〉（巻一・一四頁）」「甚深未曾有〈左傍訓：いまたむかしもあらさる〉の法を成就して（巻一・七七頁）」）。こうした漢語左傍の和訓を本文に取り入れることも不可能ではないと考えられる。実際に、成立年代が妙一本よりやや下る足利本仮名書き法華経には、妙一本の本文における漢語を、その左傍の和訓に置き換えた箇所があるのである。つまり、妙一本における和訓付きの漢語を、直接にその和訓で読み下すことは、理論的には可能である。

しかし、妙一本ではそのようになっていない。特に、妙一本においては、漢訳本文における同じ漢語が和訓で読まれる場合もあれば、字音（漢語のまま）で読まれ、更に左に和訓が付される場合もある。その結果、漢語左傍の和訓と、本文における同漢語を読み下した和訓とが共存しているのである。

前代の法華経訓読法を継承しているとされる妙一本における同一漢語の和訓／字音の読み分けは、興味深いことである。次章以降では、平安時代初期以来の漢文訓読における同一漢語、ないし同構造の語の和訓読みと字音読みの問題について検討する。

第二章「法華経訓読史における和訓読みから字音読みへの推移——否定辞と複合する語及び程度副詞と用言で構成される語を中心に」では、（一）故山田嘉造氏蔵本〈平安初期点本〉、（二）龍光院蔵本〈平安後期点本〉、（三）立本寺蔵本〈院政期点本〉、（四）妙一記念館蔵本〈中世仮名書き本〉、（五）心空版倭点法華経〈中世仮名点本〉の五点の法華経訓読資料を調査対象とする。

漢文訓読時に字音語（漢語）が多くあらわれることはよく知られている。平安時代初期の仏典訓点資料において既に字音で読まれる漢語が甚だ多い。また一方で、平安初期には和訓で読まれるが、時代が下るにつれて、字音語として読まれることが多くなる漢語もある。漢文訓読文も日本語文体の一つであるため、漢語が字音のままで読まれることは、その漢語自体が日本語の語彙として定着したことを意味すると考えられる。そして、古くは和訓で読んでいた語を、後の時代には字音で読むようになるという、和訓読みから字音読みへの推移には、その漢語が日本語の語彙として定着する経緯が見られ、これは語彙史的にも重要な問題と言えよう。

平安初期の点本では和訓で読む語を、同文経典の院政期の点本では字音で読む事象は既に先学の指摘がある。小林芳規氏は『平安時代の佛書に基づく漢文訓読史の研究 VII変遷の原理』（汲古書院、二〇一七年）第四章「和訓の音読語化」において、平安時代の訓点資料における①動詞＋補助動詞②「所」＋動詞③「乃至」④「未曾有」という四つの語詞の訓法

を考察し、これらの語は、平安初期において既に一部が字音に読まれはじめ、和訓読みと字音読みの併用が見られ、時代が下るとともに、字音読みが多く用いられるようになると指摘したが、いくつかの疑問点がある。そこで、上記五点の法華経訓読資料を対象に考察した。結論は以下の通りである。

I. 平安初期から中世にかけての法華経訓読史において、漢語の訓法が和訓読みから字音読みへ推移する現象は、先学が指摘した①②③の他に、④否定辞（「無」「不」「未」等）と複合する語（「未曾有」を含む）⑤程度副詞（「難」「甚」等）と用言で構成される語にも窺える。

II. ①②は同構造の語の全体において和訓読みから字音読みへの推移が窺えるが、④⑤における字音読みへの推移は、名詞・連体修飾としての使用頻度が高い語に集中する。

III. ④⑤の訓法には、全体的に名詞性が強い目的語・連体修飾等として用いられる場合は字音で、動詞性・形容動詞性が強い述語の場合は和訓で読まれる、という使い分けが見られる。

IV. 名詞・連体修飾としての使用頻度が高い語（「未曾有」「不可思議」「無量」「甚深」「難解」）は、述語として用いられる際も字音で読まれる傾向がある。中でも、平安初期においては和訓読みであり、平安後期以降は字音読みになったものもあり、和訓読みから字音読みへの推移が見られる。時代が下るにつれ、名詞・連体修飾の字音読みが次第に定着して述語にまで広がったと思われる。

和訓読みから字音読みへの推移という事象について、小林芳規氏は「漢字を音読することは、日本語による訓読文を作るに当って、原漢文（中国古典文）の文脈に即して、その漢字に充てるべき和語を探し当てるという作業よりは労が少なくすむ。その反面、原漢文を日本語によって文脈に即して正確に理解することからは遠ざかってしまう」と述べている（前述文献五七二頁～五七三頁）。しかし、それに加えて、もう一つの原因が考えられる。訓読の営みが蓄積することで、一部の漢語は、日本語の世界で次第に定着してきた。このような漢語は、平安初期の訓点資料のように和訓と結びつけることによって理解を深めることが必要でなくなり、字音で読んでも理解を妨げないため、字音で読まれているのではなかろうか。漢文訓読における漢語の和訓読みから字音読みへの推移は、漢語による日本語の語彙拡張と連動すると思われる。

第三章「西大寺本金光明最勝王経平安初期点と永長二年点における字音読みと和訓読み——否定辞と複合する語及び程度副詞と用言で構成される語を中心に」は、第二章の結論を、法華経以外の仏典訓点資料で検証することを目的とする。

調査資料としては、①平安初期と平安後期（乃至以降）の訓点資料が両方現存し（訓法の時代的変遷を考察するために）、且つ公刊されている、②全巻に亘って訓点が精密に施されている（訓法が分かる用例をできるだけ多く収集するために）、③語彙が豊富であると同時に、ある程度のまとまりを持つ（前章における「未曾～」「甚～」等のように、漢語とその

訓法を構造的・類型的に統計分析するために)、という条件を満たすことが望ましいため、平安初期の白点と院政期(永長二年・一〇九七)の朱点を有する西大寺本金光明最勝王経(西大寺本)を選定した。

西大寺本の白朱両点における否定辞と複合する語「未曾～」「不可～」(「無量」、及び、程度副詞と用言で構成される語「甚～」「難～」(「希有」)の訓法について考察した結果、法華経訓読史における、①同一語彙(同構造の語)の訓法には、名詞性が強い目的語・連体修飾等として用いられる場合は字音で、動詞性・形容詞性が強い述語として用いられる場合は和訓で読まれる、という読み分けが見られる、②目的語・連体修飾としての使用頻度が高い語は述語として用いられる際も字音で読まれる傾向がある、という事象は、最勝王経の訓読にも見られることが分かった。また、法華経と最勝王経のみならず、他の仏典や仏教説話にも多用される「無量」「希有」「難解」は、法華経訓読資料と西大寺本最勝王経を通じて、その訓法に和訓読みから字音読みへの推移が見られる。

第四章「漢籍における「不・無・未・難・甚～」の文中機能と訓法——仏典との異同に注目して」では、漢籍訓点資料における「不・無・未・難・甚～」の文中機能と訓法について、仏典との異同に注目しながら考察する。

主要調査資料としては、史記呂后本紀・孝文本紀・孝景本紀延久五年(一〇七三)大江家国点、及び、白氏文集天永四年(一一一三)藤原茂明点を扱う(後者における一部の訓例の参考として、金沢文庫本白氏文集と京都大学附属図書館蔵「新樂府」を扱う場合がある)。また、「不可～」については、上記二点の資料の他、古文尚書延喜(九〇一～九二三)頃点、毛詩卷六残卷延喜頃点、漢書楊雄伝天曆二年(九四八)藤原良佐点、春秋経伝集解卷第十保延五年(一一三九)清原頼業点、史記秦本紀第五天養二年(一一四五)点、史記夏本紀第二院政末期点、九条本文選をも調査する。

漢籍の訓点資料における「不・無・未・難・甚～」の訓法について調査すると、和訓読みの方が圧倒的に多く、字音で読まれる例は少数しかない。その原因は、漢籍において、これらの語は連体修飾や目的語として用いられることが少ないためであると思われる。

具体的な結論は以下の通りである。

I. 仏典において、「不・無・未・難・甚～」は連体修飾としても述語としても多用されるが、漢籍では、連体修飾としての用例が殆どなく、述語として用いられることが圧倒的に多い。漢籍では、名詞性が強い用法として、連体修飾よりも目的語の例が比較的が多いが、述語用法と比べると、はるかに少ない。

II. そのような傾向の中でも、「不・無・未・難・甚～」は全体的に名詞性が強い目的語／主語／連体修飾として用いられる場合は字音で読まれ、動詞性・形容詞性が強い述語として用いられる場合は和訓で読まれる、という文中機能による訓法の使い分けは、仏典と漢籍との両方に共通して見られる。

III. 仏典におけるほど多くないが、漢籍訓点資料においても、名詞性が強い目的語等とし

て字音で読まれることが多い語は、述語として用いられる際も字音読みが一般的である、という事象が窺える。史記延久点における「不徳」はその例である。

つまり、「不・無・未・難・甚～」のような、文法的には目的語や連体修飾としても、述語としても用いることができる漢語は、漢籍と仏典とにおける実際の使用状況（文中機能）は異なっているが、①文中機能による字音読み／和訓読みの使い分けがある、②目的語や連体修飾としての使用頻度が高い語の字音読みは述語用法にも影響が出る、という点では、仏典と漢籍とは共通している。

第五章『今昔物語集』における「無<sup>ム</sup>量<sup>リヤウ</sup>ナリ」と「無<sup>ハカリナ</sup>量<sup>シ</sup>」について」では、分布状況、文中機能、位相、出典資料との比較等の面から、漢字仮名交じり文の代表的資料『今昔物語集』（『今昔』）における「無<sup>ム</sup>量<sup>リヤウ</sup>ナリ」（「無量」の字音）と「無<sup>ハカリナ</sup>量<sup>シ</sup>」（「無量」の和訓）の使用状況について考察する。

第二章から第四章までの考察から分かるように、文中機能による字音／和訓の読み分けが見られる「未～」「不～」「無～」「甚～」「難～」等の語の中、「未曾有」「不可思議」「無量」「甚深」「難解」は、述語として用いられる際も字音で読まれる傾向がある。

但し、漢文訓読の世界で字音読みが定着した（文中機能・品詞性を問わずに字音語として読まれることが一般的になる）これらの漢語も、日本語の語彙として定着しているとは直ちに断言できない。漢文を訓読する場合、目で見て理解できる漢語は、和訓を付ける必要がなく、字音のままに読めば良い。それらは「理解語彙」ではあるが、日本語で文章を作る場合に用いられないと、「表現語彙」とは言えないからである。和文はもちろん、成立基盤に漢文訓読があり、漢語や漢文訓読語を多数受け入れた漢字仮名交じり文においても、漢語や漢文訓読語の使用に取捨選択が見られる。従って、訓点資料で字音読みが定着した漢語の、日本語の語彙としての定着度を知るためには、『今昔物語集』のような漢字仮名交じり文におけるその漢語の使用状況を調査することが必要であり、且つ有効な手段であると思われる。

「未曾有」「不可思議」「無量」「甚深」「難解」の『今昔』における使用状況は、①用例がない（「未曾有」「難解」）、②用例があり、ほぼ全用例が字音語（「甚深」「不（可）思議」）、③用例があり、漢語（字音語）とその和訓が併用される（「無量」）、という三つのパターンがある。①は『今昔』の撰者にとって表現語彙ではなく（そもそも『今昔』の出典に用いられていないことや、意味・用法が近似する語に集約されたことも考えられる）、②は『今昔』の表現語彙となっており、しかも字音語として認識されて用いられているため、日本語の語彙としての定着度が比較的高いと言えよう。

問題は③の場合である。『今昔』において、「無量」は用例数が多く、表現語彙と見て差し支えないと思われる。「無量」は仏典の頻用語であり、管見の限り、平安後期以降の仏典訓点資料においては、文中機能を問わず一概に字音で読まれるため、字音語としての定着度が高いと想定できよう。従って、「無量」も「不（可）思議」のように、『今昔』において字音語として用いられると推定できる。しかし、実際に『今昔』を調査すると、「無量ナリ」と「無

量シ」が両方とも多く用いられており、しかも次のような傾向が見られる。

I. 連体修飾の場合は「無量ナリ」、述語の場合は「無量シ」を用いる傾向がある。これは漢文訓読（訓点資料）における文中機能による字音／和訓の読み分けと通じている。

II. 出典資料における「無量」を踏襲する場合は「無量ナリ」、『今昔』の撰者が独自に改変、付加する場合は「無量シ」を用いる傾向がある。後者の場合、訓点資料における「無量」の訓法に見られない「量無ク」「量無カリツ」「量無カラムカシ」等、日本化が進んだ用法もある。このような用法の拡張は、「無量」が表現語彙として定着し、日本語化していることを意味すると思われる。

つまり、「無量」は一見すると字音語のまま日本語化したように見えるが、依然としてその和訓「ハカリナシ」と強く結び付いている。恐らく、漢字表記「無量」、字音「ムリヤウ」、和訓「ハカリナシ」の三者は一体として認識されていたのだろう。そのために、『今昔』が「無量ナリ」と「無量シ」とを併用していると思われる。